

大野仁美

1. はじめに

焦点は、音声的・形態的・統語的なさまざまな手段によって示され、また言語によっては複数の手段が用いられる。グイ語（コエ語族）では、焦点マーカ― *kī* を用い、形態論的手段によってしめされるとされてきた。その一方で、このマーカ―がどのような種類の焦点を扱うかは、調査されてこなかった。本発表では、テキストに出現する *kī* の用いられ方を観察して生じた疑問点をきっかけに、エリシテーションによって得られた事実に基づく暫定的な考察結果を述べる。

マーカ― *kī* は名詞句とそれをホストとする enclitic の間に挿入され、主語や目的語を焦点化する term focus (Dik 1997) と考えられる。例文(1)は、マーカ― *kī* (網かけで示す) が目的語に付加した例で「私は昨日 (他の物ではなく) 鍋を買った」という意味をもつ。*kī* が目的語ではなく主語の「私」に付加された場合は、「(他の者ではなく) 私が昨日鍋を買った」という意味をしめす。*kī* は文内に2つ以上生起することはできないが、生起位置における制限はない。この場合の読みは、一般的な term focus のそれである。

- | | | | | |
|-----|------------------------|------------|----------------------|------------|
| (1) | <i>cìrè</i> | <i>cʰū</i> | <i>ʰóē = kī = sà</i> | <i>ʔāĩ</i> |
| | 私.が | 昨日過去 | 鍋 = 焦点 = を | 買う |
| | 「私は昨日 (他の物ではなく) 鍋を買った」 | | | |

2. Wh 疑問文への返答および修正

Wh 疑問詞に対する解答部分や「A ではなくて B」という修正のためにもちいられる「B」の部分は、本来的に焦点化 (information focus) するとされる。ところが例(1)は、例(2)の解答としては infelicitous であると判断され(例4)、*kī* のない例(5)が用いられる。同様に、例(3)の「あなたは昨日やかんを買ったか？」に対して、それを否定し、「やかんではなく鍋を買った」という場合も、*kī* を使った例(4)は不自然であり、例(5)が用いられる。

- | | | | | |
|-----|-------------------|------------|----------------------|------------|
| (2) | <i>tsá-m</i> | <i>cʰū</i> | <i>ĩ-χò = sà</i> | <i>ʔāĩ</i> |
| | あなた 疑問 | 昨日過去 | 何 = を | 買う |
| | 「あなたは昨日何を買った？」 | | | |
| (3) | <i>tsá-m</i> | <i>cʰū</i> | <i>keetle = sà</i> | <i>ʔāĩ</i> |
| | あなた 疑問 | 昨日過去 | やかん = を | 買う |
| | 「あなたは昨日やかんを買ったか？」 | | | |
| (4) | * <i>cìrè</i> | <i>cʰū</i> | <i>ʰóē = kī = sà</i> | <i>ʔāĩ</i> |
| (5) | <i>cìrè</i> | <i>cʰū</i> | <i>ʰóē = sà</i> | <i>ʔāĩ</i> |

なお Wh 疑問詞に対する解答になっている部分以外を省略して例(6)のように返答することは可能だが、何かを一部省略することはできない（たとえば主語だけの省略や動詞だけの省略は不可）。

(6) //^hóē =sà (ʔà) 「鍋 (だ)」

3. 語順

グイ語は、コエ語族においては例外的に、主語と目的語が明示的にマークされる言語である。優勢な語順は S O V であるが、節内の構成要素順の自由度は高い。唯一の制限は TAM が主語を越えて左側に出現できない点である。簡便さのためにこれを S_(TAM)として一括して扱くと、S_(TAM), O, V の3要素から成り立つ文の場合、論理的にありうる6通りの語順すべてが文法的に適格である。Wh 疑問文の場合も同様に、Wh 疑問詞が主語であっても目的語であってもそれぞれ6通りの語順が可能である。

しかし Wh 疑問文に対する返答においては可能な語順に制限が生じ、Wh 疑問詞に対する解答にあたる要素（上記では目的語である「鍋」）よりも動詞が左に位置することはできない（SOV・OSV・OVS は可；SVO・VOS・VSO は不可）。動詞が文頭に置かれる例は、「何があった？」という質問や、「あなたは何をした？」という質問への返答としてなら一つつまり、動詞が background ではなく focus 化されている（ものの一部である）場合には——可能である。グイ語には固定された焦点の位置はなく、このような操作は必須ではない。選択的に焦点化された要素が文頭に置かれ得るが、これは、その要素が焦点化されていることをより際立たせる効果があると考えられる。

次に、マーカー *kī* を用いた例(1)が例(2)の返答として可能な状況というのではないのかというと、「買った物が唯一鍋であるような場合」ならば可能だということである。実際に、焦点構文を調査するために考えられた質問表 *QUIS*(Fedler & Schwarz 2006)で資料を収集した際、*kī* が出現したのは、*only* が用いられている以下の例だけであったこと（p.c.中川裕：日本語訳は著者による）からもこれは支持される。この例においても「だけ」という exclusive な設定でなければ *kī* は用いられない。*kī* は、日常的にも出現頻度が高いが、実際には、information focus や contrastive focus を示すためには用いられず、exclusive な場合にのみ用いられることがわかった。

(7) the woman bought the oranges and the beans. <FT-168-A>

g//àē-kò =sì kì g/ua χa = dzì kùìʔàm χa = dzì //ʔaĩ
女性=が 今日過去 オレンジと=を マメと=を 買う
「その女性はオレンジとマメを買った」

(8) [only the beans] <FT-168-B>

ēēʔē ʔé = sì kùìʔàm = dzì |ui = kī = dzì //ʔaĩ
いいえ 彼女=が マメ=を だけ=焦点=を 買う
「いいえ、彼女はマメだけを買った」

4. マーカー *kī* が用いられる場面

マーカー *kī* は「唯一」という exclusive な焦点を表すということから、cleft 文がもつような統語上の操作で得られる exclusive focus-background という情報構造を文にもたらず機能をもつと考えることが可能である（ただし *kī* は文中の位置が固定されていないので、exclusive focus の部分と background の部分に文を統語的に二分することはせず、background が focus 化された要素の前後に分かれることもある）。

さらに *kī* は、予想外の・驚きの状況を表す場合にも用いられる。たとえば、鍋を買おうと思って買い物に行ったのに、ついでに他のいろいろなものを買っているうちに肝心の鍋を買うのを忘れたことを帰宅してから気づいて、「鍋（、忘れた）！」と言う場合、例文(9)のように、「鍋」に *kī* が付加される。

(9) *cirè* //^hóē = *kī* = sà /ʔúrū 「鍋を忘れた！」
私 鍋 = 焦点 = を 忘れる

しかし例(9)は、「私が忘れた物は鍋だ」という、cleft 文的信息構造を持っていない。*kī* がなければ、これは「(買おうと思った) 鍋は、買い忘れた」「私は、(買おうと思った) 鍋を買い忘れた」という、「鍋」や「私」についての文である。驚きは表さない。それに対して *kī* を用いた例(9)は、「何か」について「何か」を述べているのではなく、文全体で新しい情報を呈示する、thetic な文である(Sasse 1987)。

最も無標の構造（この言語における基本語順は SOV）がデフォルトで、categorical な文であると考え、マーカー *kī* はそのデフォルトの文がもっている topic(や background) の低い saliency ステータスを破棄する機能をもっていると考えられる(Güldemann 2010)。この文脈では、「鍋」は買うべき（唯一の）対象として話者にはとらえられているので、買い物という行為における中心的存在であり、そのため「鍋」の情動的 saliency は低く、topic になりうる存在である。そして、これに後続する文は、これについての新しい情報をつけ加えていくことになる。このような、他の要素より saliency 階層でのステータスが低い要素のある文を topicless にするためには、detopicalisation (Lambrecht 2000; ただし topic になりうるのはグイ語の場合主語だけではなく目的語も可能であるのと、このような文を sentence focus ではなく thetic と考えるという相違点がある) が必要であり、そのために焦点マーカーが利用されると考える。

5. 旧情報を焦点化するマーカー？

このように、マーカー *kī* が、term focus としての機能だけでなく、topic-comment あるいは focus-background という構造をもたない thetic な文をつくるための機能を果たすとすると、*kī* を有する文のうち cleft 分的機能をもたないタイプがどのようなものであるかひとまず説明できそうである。しかし一方で、一般的に thetic な文が用いられる場面――

あるものが存在することを述べたり、物語の開始部分の状況設定など一で *kī* が全く用いられないという背反する事実が存在する<物語の開始部分の例を口頭発表では呈示する>。マーカー *kī* が、このような場面で用いられないことは、先にみた、Wh 疑問文に対する返答や情報の修正には用いられないことと一貫した現象である。つまり、このマーカーは「新情報」の焦点化には用いられないのではないだろうか？用いられる場合は、「唯一」という exclusive な焦点を示す cleft 文的機能を果たす。新情報の information focus は形態論的手段では示されないが、それをより salient にしたい場合は選択的に文頭に置くことができる。一方で、既に出現済みの要素、つまり「旧情報」の焦点化に用いられた場合は、cleft 文的機能を果たすのに加えて、その既出の要素の saliency のステイタスを上げて文をtheticにする機能ももつ。話題の中心にある要素は談話において、topic や background を形成するが、マーカー *kī* はそのような要素を detopicalize する役割を果たす。

ここまで見て来た新・旧の情報を談話上の意図に合わせてパッケージする際に用いる手段をまとめると、以下の表1のようになる。

表1 グイ語における情報構造のパッケージとその手段

素材となる情報の新旧	談話上の意図	用いる手段
新情報	Information focus をより salient に	語順（文頭への移動：選択的）
	Exclusive focus (cleft 文的機能)	名詞句に <i>kī</i> を付加する
旧情報	detopicalization→thetic	

謝辞 この研究は JSPS 科研費 25300029 の助成を受けている。

引用文献

- Dik, Simon C. 1997. *The Theory of Functional Grammar, part 1: the Structure of the Clause*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Güldemann, Tom. 2010. The relation between focus and theticity in the Tuu family. In Ines Fiedler & Anne Schwarz (eds.), *The Expression of Information Structure – a Documentation of its Diversity across Africa*, 69–93. Amsterdam: John Benjamins.
- Lambrecht, Knud. 2000. When subjects behave like objects: an analysis of the merging of S and O in sentence-focus constructions across languages. *Studies in Language* 24(3). 611-682.
- Sasse, Hans-Jürgen. 1987. The thetic/categorial distinction revisited. *Linguistics* 25(3). 511–580.